

科目「ボランティア活動」構築のための基礎調査

－岐阜市の病院・社会福祉施設のボランティアニーズ－

高橋 由美子、深谷 由美、菊地 亜矢子、魚住 郁子、黒木 千恵
臼田 成之、近藤 裕子、谷脇 歩実、谷口 恵美子

Subjects “Volunteer Activities” Foundation for Building Research : Volunteer Needs of Hospitals and Social-welfare in Gifu City.

Yumiko TAKAHASHI, Yumi FUKAYA, Ayako KIKUCHI,
Ikuko UOZUMI, Chie KUROKI, Nariyuki USUDA, Yuko KONDO,
Ayumi TANIWAKI, Emiko TANIGUCHI

キーワード：カリキュラム、ボランティア活動、看護学教育

Key word : Curriculum, Volunteer activities, Nursing education

はじめに

岐阜聖徳学園看護学部は、「平等」「寛容」「利他」という建学の精神の中で築いてきた人間教育を引き継ぎ、深い人間理解と高い倫理観をもって看護専門職として社会に貢献できる人材を育成することを教育目標のひとつとして掲げ開設された。そして、それを具現化する科目として「ボランティア活動」を選択必修科目として位置づけた。

本来ボランティアとは、「自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為」とされており、活動の特性として、「自主性（主体性）」、「社会性（連帯性）」、「無償性」等が挙げられている。したがって、教育課程の下に意図的・制度的に行われる教育活動と相反する性質をもつ。しかし、学校教育において他人を思いやる感謝の心、公共のために尽くす心を育てることなどが重要視されて、平成13年の学校教育法の改正

で、ボランティア活動体験の促進についての規定が盛り込まれた。そのような教育制度の中で、学生はボランティアにつながる体験をしてきている。平成10年からは、高等学校においてボランティア活動の単位化が認められるようになり、平成18年の教育基本法の改正においては、新設項として(大学)「第7条 大学は、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。」が追加された(文部科学省生涯学習政策局, 2008)。日本学生支援機構の調査によると(日本学生支援機構2009)、ボランティア経験がある大学生は増加傾向にあり、現在している18.1%、現在はしていないが以前したことがある47.1%、全くしたことがない34.7%という結果であった。そのような背景の中で、「ボランティア活動」を科目に位置づけることは、ボランティアに対する理解を体験的に

深めることができたり、ボランティア活動を始めるきっかけになるなど、教育的意義は大きい。

中央教育審議会の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)」においては、「現在の日本社会の特徴は、成熟社会、少子高齢社会、グローバル社会などと表現され、これから日本が目指すべきは、優れた知識やアイデアの積極的な活用によって発展するとともに、教育・医療・介護・保育等、人が人を支えるべき場において公正な仕組みが働く成熟社会のモデルである」とされている(文部科学省, 2012)。医療の場では、多職種が連携して質の高い効率的な医療を提供する仕組み作りが緊急の課題となっており、療養の場が在宅や地域に移行している(厚生労働省, 2011)。地域の力を含めたさらなる幅広い連携が必要とされている社会状況も見据えながら、地域におけるボランティアを考えることは看護系大学の教育にとって大きな意義がある。

現在、本大学では、学生課を中心としたボランティア活動の斡旋や、ボランティア系サークルによる活動が実施されており、大学内に学生ボランティアの基盤がある。また、岐阜市の社会福祉協議会から出されているボランティア募集情報など活用できる情報はいくつかある。しかし、科目としての位置づけをもたせる活動としての情報は十分ではなく、共同研究者より、医療施設や社会福祉施設ではボランティアを独自で募集している組織もあるという情報があった。

そして、実際に地域で行われているボランティア活動は、組織的に行われているものから責任の所在が明らかでないものまで多岐にわたり、活動内容としても、対人支援からゴミひろいなど直接人に関わらない内容まで様々である。期待される人材育成のための科目として、学生が主体的に活動に参加し、質の高い経験が保証されるように学習環境を整えることが必要である。そこで、今回は大学が存在する岐阜市においてどのようなボランティアニーズがあるかを把握するために調査を行った。ボランティ

ア活動内容としては、看護の学習の発展につながる体験が期待できる健康・福祉領域の活動に焦点をあてて調査した。本稿では、その結果をふまえて科目構築に向けた課題も検討する。

I. 調査目的

科目「ボランティア活動」構築のための基礎資料として、岐阜市内の病院・社会福祉施設が看護系大学生に期待するボランティアニーズを明らかにする。

II. 調査方法

1. 調査期間

2015年7月20日～2015年8月31日

2. 調査対象

岐阜県庁ホームページの県内施設情報から抽出された岐阜市内の100床以上の入院施設を備えた病院32施設(平成26年10月1日公表)と、入所施設を備えた社会福祉施設119施設(平成24年5月1日公表)の合計151施設とした。個人経営の小規模病院や通所だけの小規模社会福祉施設には、ボランティア受け入れに対して組織的な運営がなされていないところが多いと考え、今回の調査では対象外とした。

3. 調査方法

- 1) 無記名自記式質問紙の郵送法
- 2) 対象施設の施設長宛に協力依頼の文書と質問紙を郵送して回答を求め、返送をもって同意が得られたとみなした。
- 3) 調査内容は、看護系大学生がボランティア活動を実施することが可能であるかを検討するための情報として、①施設の概要(種類とベッド数)、②ボランティア活動受け入れの現状(受け入れの有無、活動内容、事前研修の有無)、③ボランティア活動を受け入れていない施設については、その理由、④看護系大学生のボランティア活動受け入れの有無と活動の場の可能性・その内容、とした。ボランティアの現状を問う設問は、受け入れている・受け入れ準備中・受け入れてい

ない、からの選択で回答を求めた。活動内容および受け入れていない理由を問う設問は、予想される具体的な内容を挙げて複数回答可で回答を求めた。質問紙の最後に⑤日頃ボランティアについて思っていることの自由記載と「今後、看護系大学生のボランティア活動について連絡させていただいてもよろしければ連絡先をご記載ください」という任意記載欄を設けた。

4. 分析方法

選択式の設問については単純集計し、記述式の回答は類似内容をまとめて整理した。

III. 倫理的配慮

調査は、岐阜聖徳学園大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号 2015-7）。質問紙郵送封筒に施設長宛と研究協力者宛の調査協力依頼文書を添え、研究主旨・目的・方法、プライバシーの保護、研究参加は任意であること、回答用紙の回収をもって同意が得られたと判断すること、公表を予定していることを明記した。

IV. 結果

調査対象施設 151 施設のうち、76 施設から回答が得られ（回収率 50.3%）、回答に不備の見られた 2 施設を除き、有効回答は 74 施設より得た（有効回答率 97.4%）。

1. 施設の概要（表 1）

病院は 15 施設（20.3%）で、病院の規模は病床数 100～199 床が 7 施設（46.6%）と半数を占め、100 床未満が 3 施設（20.0%）、500 床以上も 3 施設（20.0%）あった。

社会福祉施設は 59 施設（79.7%）で、内訳としては、高齢者施設が 38 施設（51.3%）、障がい児者施設が 17 施設（23.0%）、精神障がい者施設が 4 施設（5.4%）であった。施設規模としては、定員（病床数）1～19 人が 14 施設（23.7%）、20～50 人が 20 施設（33.9%）、51～99 人が 11 施設（18.7%）100 人以上が 14 施設（23.7%）であった。

2. ボランティア活動受け入れの現状

1) ボランティア活動の受け入れの有無

ボランティア活動を受け入れているのは 47 施設（63.5%）、受け入れ準備中が 4 施設（5.4%）、受け入れていないが 23 施設（31.1%）であった。受け入れている及び受け入れ準備中の 51 施設のうち、事前研修やオリエンテーションを行っている施設は 41 施設（80.4%）であった。施設の種類別にみると、病院は 8 施設（53.3%）が受け入れており、社会福祉施設は準備中を含めて 43 施設（72.9%）が受け入れていた。

2) 行われているボランティア活動内容（表 2）

ボランティアを受け入れている・受け入れ準備中の 51 施設で行われているボランティア活動内容は、患者・入所者に関わる活動のミニコンサートが最も多く 36 施設

表 1 施設の種類・施設規模

n=74			
施設の種類	施設数 (%)	入院・定員 (病床数)	施設数 (%)
病院	15 (20.3)	100床未満	3 (20.0)
		100～199床	7 (46.6)
		300～399床	1 (6.7)
		400～499床	1 (6.7)
		500床以上	3 (20.0)
社会福祉施設	59 (79.7)	1～19人	14 (23.7)
障がい児・者施設	17 (23.0)	20～50人	20 (33.9)
(内訳) 精神障がい者施設	4 (5.4)	51～99人	11 (18.7)
高齢者施設	38 (51.3)	100人以上	14 (23.7)

表2 病院・社会福祉施設で行われているボランティア活動内容(複数回答可)

活動の種類	活動内容	n=51 施設総数 (%)	施設内訳	
			病院数 (%) n=8	社会福祉施設数 (%) n=43
患者・入所者に関わる活動内容	ミニコンサート	36 (70.6)	8 (100)	28 (65.1)
	趣味活動	32 (62.7)	3 (37.5)	29 (67.4)
	コミュニケーション	22 (43.1)	4 (50.0)	18 (41.9)
	セラピー	18 (35.3)	3 (37.5)	15 (34.9)
	遊び	14 (27.5)	1 (12.5)	13 (30.2)
	見守り	12 (23.5)	1 (12.5)	11 (25.6)
	読み聞かせ	11 (21.6)	3 (37.5)	8 (18.6)
	移動	9 (17.6)	4 (50.0)	5 (11.6)
	整髪	6 (11.8)	2 (25.0)	4 (9.3)
	施設案内	5 (9.8)	4 (50.0)	1 (2.3)
	配膳	5 (9.8)	0	5 (11.6)
	移乗	3 (5.9)	3 (37.5)	0
	リネン交換	3 (5.9)	0	3 (7.0)
	食事介助	2 (3.9)	0	2 (4.7)
	髭剃り	1 (2.0)	0	1 (2.3)
	学習	1 (2.0)	0	1 (2.3)
病院施設の環境整備に関わる活動内容	掃除	15 (29.4)	1 (12.5)	14 (32.6)
	庭木の剪定	10 (19.6)	2 (25.0)	8 (18.6)
	物づくり	4 (7.8)	1 (12.5)	3 (7.0)
	リネンの整頓	3 (5.9)	1 (12.5)	2 (4.7)
	患者の衣服の洗濯	3 (5.9)	0	3 (7.0)
	物品の整備	3 (5.9)	1 (12.5)	2 (4.7)
	リネンの洗濯	1 (2.0)	0	1 (2.3)
病院施設主催のイベントに関わる活動内容	夏祭り	32 (62.7)	3 (37.5)	29 (67.4)
	クリスマス会	15 (29.4)	1 (12.5)	14 (32.6)
	文化祭	8 (15.7)	0	8 (18.6)
	節分	7 (13.7)	1 (12.5)	6 (14.0)
	飾り付け	6 (11.8)	3 (37.5)	3 (7.0)
	正月	6 (11.8)	1 (12.5)	5 (11.6)
	日帰り旅行	3 (5.9)	0	3 (7.0)
その他	15 (29.4)	6	9	

(62.7%)、夏祭り 32 施設 (62.7%) であった。施設の種別別にみると、病院 8 施設全てでミニコンサートが行われており、患者とのコミュニケーション、移動、施設案内が各 4 施設 (50.0%) で行われていた。社会福祉施設 43 施設で行われているボランティア活動では、趣味活動 29 施設 (67.4%)、夏祭り 29 施設 (67.4%)、ミニコンサート 28 施設 (65.1%) の順で多かった。その他に記述されていた活動内容としては、外出時の支援や施設内喫茶の手伝いなどがあった。

3) ボランティア活動の受け入れをしていない理由(表3)

施設の内訳としては、病院が 7 施設、社会福祉施設が 16 施設であった。その理由としては、ボランティアの必要がない 5 施設 (21.7%)、ボランティアを調整する人がいない 5 施設 (21.7%)、依頼したい活動内容が技術を必要とする 4 施設 (17.4%)、どこに依頼すればよいかわからない 4 施設 (17.4%)、日程が合わない 3 施設 (13.0%)、個人情報保護の問題がある 2 施設 (8.7%) であった。施設の種別別にみると、病院 7 施設の内 3 施設 (42.9%) が、ボランティアを調整する人がいない・日程が合わないを挙げている。社会福祉施設 16 施設では、ボラ

表3 ボランティア活動を受け入れていない理由(複数回答可)

理由	n=23 施設総数 (%)	施設内訳	
		病院数 (%) n=7	社会福祉施設数 (%) n=16
ボランティアの必要がない	5 (21.7)	1 (14.3)	4 (25.0)
ボランティアを調整する人がいない	5 (21.7)	3 (42.9)	2 (12.5)
依頼したい活動内容が技術を必要とする	4 (17.4)	1 (14.3)	3 (18.8)
どこにお願いすればよいかわからない	4 (17.4)	0	3 (18.8)
日程が合わない	3 (13.0)	3 (42.9)	1 (6.3)
個人情報保護の問題がある	2 (8.7)	1 (14.3)	1 (6.3)
危険性を考慮している	1 (4.3)	0	1 (6.3)
ボランティア希望の申し出がない	1 (4.3)	0	1 (6.3)

表4 看護系大学生の受け入れ状況および活動可能内容の有無

	施設数 (%)	施設内訳		
		病院数 (%) n=15	社会福祉施設数 (%) n=59	
看護系大学生の受け入れ状況	受け入れている	21 (28.4)	5 (33.3)	16 (27.1)
	受け入れ準備をしている	9 (12.2)	0	9 (15.3)
	受け入れていない	44 (59.4)	10 (66.7)	34 (57.6)
ボランティア可能な活動の有無	あり	57 (77.0)	13 (86.7)	44 (74.6)
	なし	17 (23.0)	2 (13.3)	15 (25.4)
受け入れ可能な連絡先記入施設	記載あり	52 (70.3)	12 (80.0)	40 (67.8)
	記載なし	22 (29.7)	3 (20.0)	19 (32.2)

ボランティアの必要がない4施設(25.0%)、依頼したい活動内容が技術を必要とする・どこにお願いすればよいかわからない3施設(18.8%)が多かった。

3. 看護系大学生ボランティアの受け入れについて(表4)

1) 受け入れの現状

看護系大学生の受け入れをしている施設は21施設(28.4%)、受け入れ準備をしている施設は9施設(12.2%)、受け入れていない施設は44施設(59.4%)であった。施設の種別別にみると、病院15施設の内5施設(33.3%)が受け入れており、10施設(66.7%)が受け入れていなかった。社会福祉施設59施設では、受け入れている16施設(27.1%)、受け入れ準備中9施設(15.3%)、受け入れていない34施設(57.6%)であった。

2) 看護系大学生に可能な活動の有無と内容

看護系大学生に可能な活動があると回答し

たのは57施設(77.0%)で、なしは17施設(23.0%)であった。施設の種別別では、病院15施設の内13施設(86.7%)、社会福祉施設59施設の内44施設(74.6%)があると回答していた。活動の内容としては、施設主催のイベントに関わる活動が39施設(68.4%)、患者入所者に関わる活動が38施設(66.7%)、病院施設の環境に関わる活動が21施設(36.8%)であった。また、任意記載の連絡先記入欄には、52施設(70.3%)が記載をしてあった。

4. ボランティアについて日頃思っていること

現状の記述とともに、ボランティアの受け入れを希望する旨の記述が13施設あり、その内の3施設は継続的なボランティアを希望していた。また、ボランティアに対する感謝の気持ちの記述が6施設、ボランティア受け入れ方法を知りたいという記述が2施設あった。

また、ボランティア活動への取り組み姿勢に

対する記述が7施設からあり、積極的な参加が少ない、対象理解をしてほしい、学ぶ姿勢を大切に、目的を持って活動すれば意義は大きいなどの内容であった。

V. 考察

今日、ボランティア活動は多岐にわたる方面で行われており、大学生も地域活動や教育支援、福祉活動への参加などの取り組みをしている。ボランティア活動を取り入れた授業科目等を開設する大学も増加傾向にある（日本学生支援機構，2009）。今回、看護学部の科目「ボランティア活動」を考えるにあたり、三本松ら（2007）が述べるように、福祉ボランティアの領域における体験の中で相互支援関係について感じ考えることが看護の学習の発展につながると考え、岐阜市の病院・社会福祉施設におけるボランティアニーズの調査を行った。

1. 岐阜市の病院・社会福祉施設における看護系大学生へのボランティアニーズについて

岐阜市の入院入所施設をもつ病院・社会福祉施設の63.5%がボランティアの受け入れをしており、その中で看護系大学生のボランティア活動を受け入れているのは、28.4%であった。しかし、病院・社会福祉施設のボランティアニーズとしては、77.0%が看護系大学生に可能な活動内容があると回答しており、70.3%の施設が今後の連絡先を明記してあったことから、看護系大学生への期待は大きいと考えられる。施設のボランティアニーズはあるが、実際にボランティア活動が行われていない理由としては、学生生活の中で時間的な調整が困難なこと、施設の情報発信と学生の情報把握をつなげる仕組みが不十分であること、学生の意識や関心が低いことなどが推測される。

現在行われている活動内容としては、病院においては、ミニコンサートがボランティアを受け入れている全ての病院で行われており、安全に提供でき共に楽しめる活動として学生の取り組みが期待される。また、夏祭りなどの単発の

イベントは、日程的にも活動しやすく、飾りつけは対象者との関わりをもちながら行えるものであれば対象理解を深めながら学生が主体的に取り組める活動である。しかし、施設案内や読み聞かせは平日の活動となるため参加は困難である。社会福祉施設において行われている活動は多く、ミニコンサート・夏祭り・クリスマス会などの単発のイベントは活動しやすく、趣味活動や話し相手・遊び・見守りなどを通して入所者と関わることは、様々な人生との出会いや気づきの機会となる。日常生活の援助に関連する配膳・食事介助・移動などは、窒息・転落の危険などを伴うため、活動範囲の確認と事前の研修が必要となる。施設の環境整備に関する活動へのニーズもあり、作業を通して入所者の生活を考えることは大切であるが、作業的な活動に終始することのないように注意が必要である。

自由記述には、ボランティアに対する感謝や期待とともに、看護系大学生への学ぶ姿勢への期待や提案が記されていた。施設のボランティアニーズや学生を育てようという価値観と大学としての考えを照合させながらボランティア活動の場を検討していくことが必要である。

2. 科目「ボランティア活動」の構築に向けて

ボランティアは、本来主体的活動であり自らの動機によって行動し実践していくものである。しかし、学校教育の一環として行うことの意義も認められており、今日の教育場面に希薄になっている体験を提供する機会となっていることは明らかである（植田，2011）。また、福祉教育や生涯学習としての意義も大きい（岡本ら，2006）。ボランティア活動を取り入れた授業科目等を開設する大学も増加傾向にあり、平成20年度320校（全体の35.4%）、その対象は、社会科学（31.1%）、人文（26.6%）、教育（10.6%）という調査結果が報告されている。学生のボランティア活動を支援する上での課題や困難としては、担当者や運営体制の問題、活動時間や交通手段の確保の問題、関係機関との連携の問題

など多くの事柄が上がってきている（日本学生支援機構 2009）。

単位を認定する科目として位置付けるにあたっては、学習目標・学習方法・評価などの枠組みを定め、単位認定にふさわしい内容であることが必要である。今回の結果をふまえながら、施設の場所や対応窓口などの施設体制も含めて学習方法の検討をしていく必要がある。また、単位認定という位置づけがあると、ボランティア保険に加入できず、学生教育研究災害傷害保険（略称「学研災」）にて学生の安全を守ることになる。学研災は、学校が認めた活動に対する補償であるため、制約を設けることが必要になる。その中で、学生一人一人の成長・教育的効果を見据えて、なるべく自由意思による主体的な選択ができるような実施方法を創出し、学生へ提供していくことが今後の課題である。実施方法を考案するにあたっては、フィールドの開拓と整備、活動時期や時間帯の調整、交通手段の確保などへの配慮が必要である。

更に、岡本ら（2006）が、ボランティア活動を続けていくためには、内発的報酬（活動することによって動機が満たされる）を得ることができたと実感することが必要であり、ボランティアをマネジメントしたり、スーパービジョンしたり、サポートしたりする役割が重要であると言っているように、科目担当教員のボランティアコーディネート力を培っていくことも求められている。

VI. 結論

1. 岐阜市の入院入所設備のある病院と社会福祉施設の 63.5% がボランティア活動を受け入れているが、看護系大学生のボランティア活動を受け入れているのは 28.4% であった。

しかし、看護系大学生が可能なボランティア活動があると回答した施設は 77.0% で、看護系大学生への期待は大きい。

2. 科目「ボランティア活動」の構築にあたって、地域のボランティアニーズと教育目標を照合して、フィールドの整備、時期や時間帯の調整、交通手段の確保など学習方法を検討していくことが今後の課題である。

謝 辞

今回の調査にご協力いただきました対象者の皆様に感謝申し上げます。なお、本研究は平成 27 年度岐阜聖徳学園大学看護学部研究助成を受けて実施した研究の一部である。

文 献

- 植田嘉好子（2011）：ボランティア教育の現象学
他者支援を教えるとは何か，文芸社，4.
- 岡本榮一、菅井直也、妻鹿ふみ子編（2006）：学生のためのボランティア論，社会福祉法人
大阪ボランティア協会，49-51,106-108.
- 厚生労働省チーム医療推進方策検討ワーキング
グループ（2011）：チーム医療を推進するための
基本的な考え方，2011.3.2.
- 日本学生支援機構（2009）：平成 20 年度大学等
におけるボランティア活動の推進と環境に関
する調査報告書，平成 21 年 3 月.
- 三本松政之、朝倉美江（2007）：福祉ボラン
ティア論，有斐閣アルマ，17-21.
- 文部科学省生涯学習政策局（2008）：文部科学省
におけるボランティア活動の推進について，
平成 20 年 12 月 5 日.
- 文部科学省（2012）：新たな未来を築くための大学
教育の質的転換に向けて（答申），中央教育審
議会，平成 24 年 8 月 28 日.